

産業建設常任委員会調査報告書

1 調査事件

稼げる観光産業づくりについて

2 調査目的

平成 30 年 3 月に策定した第 3 次庄内町観光振興計画では「稼げる観光産業づくり」を主要施策の一つとして掲げている。

本町の観光交流人口が 100 万人を越えようとするなか、観光収入を増やす取り組みが求められている。そこで経済効果を地域内への幅広い産業に波及させるため調査することとした。

3 調査経過

平成 31 年 3 月 11 日 (会期中) 聞き取り
平成 31 年 3 月 15 日 (会期中)
平成 31 年 4 月 17 日 商工観光課聞き取り
平成 31 年 4 月 24 日
令和 元年 5 月 21 日
令和 元年 6 月 12 日 (会期中) 聞き取り
令和 元年 6 月 17 日 (会期中)
令和 元年 6 月 26 日 視察調査 群馬県甘楽町
令和 元年 6 月 27 日 視察調査 長野県木祖村
令和 元年 6 月 28 日 視察調査 長野県山ノ内町
令和 元年 7 月 10 日
令和 元年 7 月 24 日
令和 元年 7 月 31 日
令和 元年 8 月 5 日
令和 元年 8 月 22 日
令和 元年 10 月 03 日 現地聞き取り調査 庄内町観光協会、風車村センター
カートソレイユ最上川
令和 元年 10 月 10 日 県内視察調査 やまがたアルカディア観光局 (長井市)
なかつがわ農家民宿組合 (飯豊町)
令和 元年 10 月 11 日 県内視察調査 ファミリーロジ旅籠屋・寒河江店
令和 元年 10 月 23 日 現地聞き取り調査 清川歴史公園、北月山荘、タチラボ
令和 元年 10 月 30 日
令和 元年 11 月 18 日
令和 2 年 1 月 15 日
令和 2 年 1 月 23 日
令和 2 年 1 月 29 日
令和 2 年 2 月 5 日

令和 2 年 2 月 7 日

令和 2 年 2 月 18 日

4 調査状況

[現況]

本町の主な観光事業には楯山公園桜まつり、夏宵まつり、月山龍神マラソンの他、余目まつり（観光協会後援事業）等がある。交流人口拡大に期待される施設としては、八幡スポーツ公園、文化創造館「響ホール」、庄内町ギャラリー温泉「町湯」、新産業創造館クラッセ、カートソレイユ最上川、道の駅しょうない「風車市場」、風車村、清川歴史公園（荘内藩清川関所川口番所、船見番所、清河八郎記念館）、北楯大堰世界かんがい施設遺産、月の沢温泉北月山荘等がある。また、まち歩き事業と連携し観光客を自主的に受け入れている事業者もあるなど、誘客数全体は順調に増加している。

一方、観光収入や経済効果については施設内での物品販売、イベントなどによる飲食等の消費総額（観光客数（誘客数）×消費単価×域内調達率）で表すことができるが、現状では町は、数値をもって示すことはしていない。

稼げる観光産業づくりを進めるためには、施設整備と運営が相互に機能していくことが重要で、様々な組織や業種が連携していく必要がある。本町では指定管理者や町の委託による個別の施設運営となっており、点を線に、線から面とする稼げる観光産業づくりは今後の取り組みとなっている。

(1) 観光交流人口

別表 1 は本町の各施設、あるいはイベント等における交流人口（入込数）の推移を示したものである。

入込総数では、平成 25 年度には約 331,000 人とどまっていたが、新産業創造館クラッセやギャラリー温泉町湯などの大型施設が営業を開始した平成 26 年度には約 709,000 人に達した。その後、平成 27 年度から平成 30 年度までの入込数は増加傾向にあり、平成 29 年度と平成 30 年度は、約 940,000 人を超え 100 万人に達しようとしている。その内訳をみると新産業創造館クラッセ、ギャラリー温泉町湯の入込数は、年度ごとの若干の増減はあるが、それぞれ 10 万人の水準を維持している。一方、八幡スポーツ公園の入込数が増加し、さらに、道の駅しょうない風車市場では、道の駅となった平成 29 年度からはそれまでの約 2 倍の 200,000 人越えの利用者があり、全体を大きく押し上げている。また、施設や事業における入込数の差異は、施設の用途・規模、事業目的の違い、飲食を含む物品販売等の有無などによるものと考えられる。

(2) 稼げる観光産業づくり

ア 観光拠点の現状

近年、観光旅行は、体験型観光に変化してきている。観光客が求めているものは、旅先での人との出会い、癒されたい、ゆったりした時間を過ごしたい、そのような感情や満足感が観光客を引きつける時代となってきている。また旅行スタイルも団体から小グループ、さらには個人での周遊型観光が主流となってきている。

本町の観光資源には、立川地域の豊かな自然景観に恵まれた楯山公園狩川城跡を含む風車村一帯、最上川を起点とし歴史の里として整備された清川歴史公園、日本名水百選に認定された立谷沢川、ここを本流とし世界かんがい施設遺産に認定された北楯大堰、さらに上流には月の沢温泉北月山荘がある。

これらの地域にある観光資源を、観光の拠点として稼げる観光産業づくりにつなげていくためには、観光客の入込数の増加をさらに図っていく必要がある。

また、老朽化してきた施設等もあることから、施設の再整備や周辺のインフラ整備等も同時に求められている。

イ 風車村（ウインドーム立川）

総事業費約 4 億 6000 万円で平成 7 年度に設置された施設である。当時は委託業者による軽食コーナーも開設されていたが、来場者の減少に伴い 2 年ほどで営業をやめている。現在は館内の事業説明用の会議室として使用している。隣接のシンボル風車は令和元年度、解体費 16,386 千円で撤去され、ウインドームの屋根等も改修の予定で調査費 20,163 千円を計上し、軽微な修理は既に進めている。

利用状況は、令和元年度 4 月から 8 月末現在の累計で約 2 万 5400 人となっており、課外授業等による町内外の園児・児童の利用が多い。また平成 30 年度までの入込数は別表 1 に示した通りである。

一方事業では、ラベンダーの摘み取りができなくなったことが参加者数に大きく影響したが、個々の事業では村長を中心に庄内町風車村エコランド実行委員会の皆さんの取り組みにより、新たに実施した事業もあり参加者数は回復傾向にある。次表は事業参加者の状況を示したものである。

単位：人

事業名	28 年度	29 年度	30 年度	合計
きのこの植菌体験	49	50	60	159
風車村花の名所づくり	28	12		40
キャンドルづくり	35	31	28	94
風車村ナイトガーデン	13		100	113
ラベンダー摘み取り	756	183		939
わくわくエコ工作教室	204	250	250	704
クリスマス in 風車村			100	100
雪で遊ぼう in 風車村		200	225	425
合計	1,085	726	763	2,574

またウインドーム周辺の法面等では景観に配慮された四季に合わせた花々が植栽され、平成 30 年度のスライド映像による事業報告では、参加者の生き生きとした表情が印象的であった。平成 27 年 9 月に本報告したウインドームを含む周辺の振興策としての提言が活かされており、互いの成果として確認できた。

これからの課題としては、ウインドームを含めた農林漁業体験実習館等を有効活用するための事業展開と魅力の発信方法や、地元住民の利用率向上を図りたいとしている。

ウ 子ども広場とバッテリーカー

子ども広場は平成5年に完成し、現在、子ども用バッテリーカー10台が稼働している。年間収入は約100万円となっている。また、冬場は広場の地形を利用して雪上滑り台など、雪原での遊びの場として活用している。

エ 農林漁業体験実習館

建設費約5000万円で昭和60年度に設置され、調理室兼食堂、研修室、天体観測室、浴室等が設備されている。3階の天体観測室は、施設の構造上の問題で使用できなくなっており、平成26年の強風により屋根等の一部が破損し、平成30年に約1400万円で修繕している。2階は、年間10数団体の夏期間簡易宿泊施設としての利用があり、1階の調理室には、そば打ち体験の器具・機材も整っているが、余り使用されていない。施設全体の利用状況は平成29年度では総数2,936人、平成30年度は4月から6月に屋根工事を行った関係で874人となっている。下表は令和元年度の利用状況を示したものである。但し12月～3月末までは、いずれの年度も休館としている。

単位：人（団体数）

月	体験農園	貸館	宿泊	そば打ち	合計
4月	0	30	0	0	30
5月	70	40	0	0	110
6月	60	86	86	0	232
7月	0	563	63	0	626
8月	0	164	191	0	355
9月	0	0	0	0	0
10月	30	72	0	42	144
11月	0	27	0	0	27
合計	160(3)	982(16)	340(11)	42(1)	1,524(31)

(9月は屋根修繕のため休館)

オ 清川歴史公園

総事業費約1億1000万円を投じ平成31年4月末に、清川関所（川口番所等）が復元整備され「歴史の里清川」を体感できる町歩きの拠点施設としてオープンした。

松尾芭蕉上陸の地ともなっているこの施設周辺には、清河八郎記念館、戊辰の役古戦場跡、歓喜寺、源義経・武蔵坊弁慶とゆかりの深い御諸皇子神社などがある。また地域のなかを流れ、庄内平野の稲作に大きく寄与している、世界かんがい施設遺産に登録・認定された北楯大堰などがあり、観光資源が豊富な地域となっている。令和元年4月から8月までの来所者数は約5,000人で、うちガイド利用者は約200人、食堂利用は約1,200人となっている。

カ 月の沢温泉北月山荘と周辺施設（鶴巻池、ケビン、ロッジ、キャンプ場）

温泉施設内にある「レストランやまぶどう」では、地元でとれる様々な山菜の小皿料理のほか、養殖された岩魚の塩焼きや、6次産業化による加工食品（甘露

煮)などを利用者に提供している。当施設は立谷沢川流域地域振興における拠点施設となっているが、令和元年度は、冬季間の12月から翌年3月までは試験的に閉館している。

一方、実行委員の減少や駐車場の確保、除雪対応の難しさにより事業を断念した「月の沢龍神冬まつり」や冬期閉鎖した北月山荘には再開を望む声もある。

ケビンは鶴巻池に隣接した簡易宿泊施設で4棟設置されており、ほかにキャンプ場も設置されている。さらに、高台にあるロジは、多目的な使用も可能な施設となっており、コンサート会場としても活用され、眼下には旧スキー場跡地があり、南部山村広場まで一望できる自然景観に優れた位置にある。

北月山荘と、その周辺施設を含めた利用者数は、平成30年8月末時点で6,335人、令和元年8月末では5,812人となっている。そのうち、ケビンは137人、ロジで20人、キャンプ場は熊の出没があるとのことから、利用希望がある場合は南部山村広場を紹介しているため利用者はいない。

キ 南部山村広場

敷地は県の管轄となっており、国交省(新庄河川事務所)、その他関係機関や利用団体と連携しながら本町で管理・運営及び整備をすすめている。周辺には平成29年6月に登録有形文化財(建造物)に登録され、現在では復元が難しいとされる高い技術力で建設された瀬場砂防堰堤せばさぼうえんていや六渕砂防堰堤ろくぶちがあり、景観の素晴らしい立谷沢川の魅力ある親水空間ともなっている。

広場周辺には、モトクロス大会(龍神月山)が開催できるスペースも隣接しており、実績として2,000人程度の集客も可能となっている。また、以前はラベンダーが植栽されている区域もあったが、花の生育が思わしくなかったため残った花は風車村に移植され、現在は更地のままとなっている。

ク 立谷沢川流域活性化センター(タチラボ)と地域おこし協力隊

タチラボは、旧立谷沢保育園を約7000万円を投じ改修され、6次産業化共同加工場等が内設されており、平成30年9月から稼働している。

地域おこし協力隊は、現在フードディレクター2人、ライフデザインディレクター1人の計3人で活動している。具体的な活動内容としては、イベントの企画・実施や各種物産展に出店するなど、販売促進の仕組みづくりにも取り組んでいる。

また、地域おこし協力隊等が開発した「庄内町のほしがきさん」が、やまがた土産菓子コンテストで、土産菓子部門最優秀賞に輝くなど、地元農産物の商品開発支援にも取り組んでいる。

ケ カートソレイユ最上川

東北最大級のJAF公認レーシングカートコースで、全国カート選手権主催者からは、最上川を背景とした自然景観のすばらしい施設で、直線走行の長い本格的なコースとして高評価を得ている。例年、全日本選手権やシリーズ戦等が開催され、レーサーを目指す人の利用が多くなっている。営業期間は4月から11月までの9時~17時、定休日は毎週火・水・木曜日となっている。利用料金はスポーツカートが1回券1,100円、レジャーカートが1回券600円と設定されており、町民の場合は半額の利用料金となっている。

平成 30 年 8 月の大雨による洪水被害では、全国のモータースポーツファンのボランティア活動の応援もあり、順調に施設改修が行われ運営を再開している。

当初懸念されていた利用状況は、ふるさと応援寄附金による 6 台の最新カートを整備した関係もあり、令和元年度の 4 月と 5 月の前年度比較では増加している。

これからの課題としては、利用者の拡大を図るため、高齢者や子供を対象としたモータースポーツ教室の開催、集落対抗レースなど、併せて家族で楽しめるスペースづくり等をあげている。

コ 中心市街地内の誘客施設

本町の中心市街地内にある各施設においては、それぞれ一定の交流人口（誘客数）は期待できるが、明確な設置目的があり観光拠点とはならない。

しかし、施設の利用目的以外のオプション（ハード・ソフト共）の充実により地域産業への消費誘導を喚起することは可能であり、その施策が求められている。

(3) 観光協会、商工会との連携

ア 事業費

観光協会の平成 30 年度一般会計収支決算書（別表 2）では、支出ベースで総額約 2143 万円のうち事業費が 2105 万円となっており、予算の約 98.2%を占めている。その内訳は主催事業費が約 840 万円、後援事業費が約 217 万円、本部事業費が約 1047 万円となっている。

さらに、令和元年度の予算書（別表 3）をみると、新規事業として「龍（どら）まちっくプロジェクト」を立ち上げるとし 100 万円を計上するなど、前年度決算に対し 104 万円増の 2246 万円となっている。

この事業実施に向け、従来の「龍」の補修や新たな「姫龍」の制作が必要だとし「ふるさと応援寄付金基金」の特定事業として募集したところ、目標の 500 万円を令和元年 10 月に達成している。

イ イベント等事業運営

観光協会の事業カテゴリは大きく主催事業と後援事業、本部事業に分けられ、後援事業を除けば実質上は担当課がほぼ主体となっており、運営は商工会、住民等の協力を得て行われている。担当課には事業運営に対するノウハウの蓄積はあるものの、多くの事業があるなか運営のマナー化やマンパワー等の確保が難しい状況となってきている。

ウ 観光協会の形態

観光協会は収益を上げることを目的としていないことから、稼げる観光産業、あるいは観光事業をめざすには町は新たな考え方も必要としている。多くのイベントや事業では商工会と連携し、出店による消費誘導も行われているが、イベント域内での消費に留まっており、既存の商店等への波及効果等については明確になっていない。

他の市町村によっては新たな取り組みとして、観光協会の法人化を進め収益事業に取り組んでいる事例もあるが、本町では具体化していない。

エ 観光協会の現状と主な課題

(ア) 交流人口の拡大が観光事業の経済効果にはつながっていない

- (イ) 若い人たちが働くことができる地場産業の発展、商工事業者の活性化、若い女性にとって魅力を感じる町づくりの取り組み
- (ウ) 高規格道路全線開通に向けた施策、インター付近の大規模道の駅設置など月の沢温泉北月山荘を中心とする、観光の拠点としての可能性調査が必要
- (エ) 教育旅行の拡大と充実、農家民宿による一般旅行者の拡大施策はないか
- (オ) クラッセ周辺における駐車場のさらなる確保
- (カ) 観光協会事務局職員の専任化

オ 教育旅行（グリーンツーリズム）

本町では観光専門員が中心となり、中学生たちを一般家庭に宿泊をさせ、農山村での体験を通して地域の方々と交流をする、教育旅行の受け入れを行っている。聞き取り調査では、この教育旅行を希望する教育機関は多いものの、本町では、宿泊する一般家庭の確保・理解が難しいとしている。

(4) 観光産業と旅行業法及び DMO*

全国的には、観光事業を産業とするため鉄道会社や地域の観光協会といった、いわゆる従来の旅行会社とは違う組織団体が旅行業務に関心をもち、旅行業務取扱管理者の取得に力を入れ始めている。その背景には、着地型旅行の普及を目的とし、第3種旅行業者の登録の規制緩和が行われたことにある。

その結果、着地型旅行商品の企画や販売を可能にするために旅行業務取扱管理者を取得する観光協会が増加しており、観光客の増加により観光産業が多様な産業と関わりを持つことが認知され、広く観光の視点を持つことが事業にとってプラスになるという考えが広まってきたためである。

全国では DMO 登録することで広域的な観光行政に取り組む事例もあるが、法人格を取得する必要がある組織の見直し等も考えられることから、本町では時期尚早と考えている。

※DMO（デスティネーション、マネージメント/マーケティング、オーガニゼーション）

地域の「稼ぐ力」を引き出すとともに地域への誇りと愛着を醸成する「観光地経営」の視点に立った観光地域づくりの舵取り役として、多様な関係者と協同しながら、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定するとともに、戦略を着実に実施するための調整機能を備えた法人のこと

(5) 県内の状況

ア 一般社団法人やまがたアルカディア観光局（長井市）

(ア) 概要

当観光局は「道の駅川のみなと長井」に事務局を置き、長井市、南陽市、白鷹町、飯豊町の2市2町からなる地域連携（DMO）による観光地域づくりを推進する一般社団法人で、国の支援（地方創生推進交付金等）を活用し、地域に多くの人を誘客し消費を呼び込むことを目的としている。

また、旅行業登録の第2種を取得し飲食・宿泊・交通などの民間業者や行政機関といった幅広い関係者と連携し、互いの意見調整や観光振興を図ると共に、観光プラン（滞在交流型旅行商品）等の開発にも取り組んでいる。

(イ) 組織

社員総会の下に理事会（理事長 1 人、副理事長 3 人、理事 9 人、専務理事 1 人）があり、さらに戦略会議がその下に設けられている。戦略会議は 2 専門部会（9 チーム）を統括し、専門部会は、それぞれの課題に即した協議を行い戦略会議に上程する。戦略会議は、官民広域連携体制の強化と諸分野の政策立案及び提案を主たる業務とし、一部事業を実施する。

事務局は長井市から 3 人が派遣され、その他正職員 4 人と臨時職員 3 人の 10 人体制で運営している。

(ウ) 地域・観光振興事業及び広域連携の主な課題

地域課題には、

- ・人口減少による地域経済の縮小
- ・人手不足
- ・伝統工芸、文化の継承の人材不足
- ・域内公共交通の整備不足
- ・行政主導の地域づくりによる行政の負担の増加
- ・民間の役割（協働）が不明瞭

などとしている。

観光振興事業の取り組みの課題では、

- ・イベント型の誘客による通年の集客不足
- ・イベントのみの消費で商店街や店舗などの地域内消費が少ない
- ・消費を伸ばすコンテンツが不足している
- ・観光客の受け入れ体制の仕組みづくりが不十分
- ・観光協会、行政の取り組みがバラバラで、明確なブランドコンセプトに基づいた誘客の取り組みが見えない
- ・宿泊施設の選択肢が少ない

などとしている。

広域連携の課題としては、

- ・行政単位の観光振興に対するスタンスが違うため一定の合意を得るのに時間がかかる
- ・責任ある法人運営のため多額の予算を必要とする
- ・人材育成に時間がかかる

などを掲げている。

(エ) 交流人口と KPI*及び PDCA サイクル*

交流人口のカウントについては一定の決まった表し方はないが、概数ではなく実数で積算するという方法で、独自に 3 年くらいかけアンケート調査等を行いながら、より実質的な数値をもって KPI や PDCA サイクルに反映させるとしている。

※KPI：業績評価を定量的に評価するための指標

※PDCA サイクル：Plan（計画）、Do（実行）、Check（評価）、Act（改善）の 4 段階
繰り返すことによって、業務を継続的に改善する考え方

(オ) 組織づくりと運営

最も重要な点は、

- ・市民、事業者、各団体、行政、議会が同じベクトルを軸に、観光地域づくりのプラットフォームのコンセプトを共有する
- ・自立を目指すための方策を確立する
- ・専門事務局員の確保、旅行業取扱管理者や旅程管理者を確保する
- ・訪問者のためのワンストップの窓口サービスや、情報を一元的に発信するツールの構築

としている。

また、観光客が来ないと嘆くのではなく、どれだけ地域にお金を落とすとしていただくかという考え方にシフトしていくことや、行政と観光協会あるいは各事業所等との垣根を取り外すことも重要だとしている。

(カ) 令和元年度一般会計収支予算書

(単位：千円)

事業活動収入		
事業収入	17,406	滞在交流、ランドオペレーター※、会費等
運営補助	8,461	長井市
事業費補助	116,322	地方創生推進交付金、誘客強化事業補助
雑入	1,591	
計	143,780	
事業活動支出		
事業費支出	132,167	
地方創生事業	112,657	
旅行商品企画販売	65,393	企画販売催行、DMO運営、マーケティング調査
受入体制整備	11,808	インバウンド窓口整備、インナープロモーション
PR事業	31,636	観光プランディング、国内外プロモーション
観光施設整備	3,820	芋煮体験
旅行業実施支出	14,034	
団体旅行助成事業	3,000	バス団体誘客補助
その他	2,476	二次交通事業、レンタサイクル、クーポン
管理費支出	11,613	
計	143,780	

※ ランドオペレーター（ツアーオペレーター）：旅行会社の依頼を受け、旅行先のホテルやレストラン、ガイドやバス・鉄道などの手配・予約を専門に行う会社のこと

イ なかつがわ農家民宿組合（飯豊町）

中津川地区は、世帯数111、人口261人の山村地帯にあり、高齢化率58.8%（飯豊町全体では36.7%）と高い地区である。特産品としては、どぶろく関連商品、山菜、ヤマメ、花笠、鳴き砂などがある。また、牧草に恵まれているため米沢牛の子牛の育生地域ともなっている。

(ア) 設立の背景

白川ダム建設に伴い地域の過疎化が進むなか、住民の危機意識が高まり独自のむらづくりの取り組みが行われ、平成に入りグリーンツーリズムがきっかけとなり近隣都市との交流がはじまった。

平成 16 年に山村留学を受け入れるため「里親の会」が発足し、平成 19 年度には教育旅行を受け入れるため、里親の会が中心となり農家民宿組合が設立された。平成 26 年度には地産地消優良活動による農林水産大臣賞を受賞し、さらに、平成 28 年度には山形県農業賞を受賞するなど中津川地区の評価が高まっており、現在は 7 軒の加入となっている。

(イ) 活動の状況

- ・ 地域資源を活用したグリーンツーリズムの受け入れ
- ・ 山村留学の受け入れ
- ・ 農家民宿事業の展開
- ・ 農山村居住者の受け入れ
- ・ 中津川むらづくり協議会への参加

教育旅行の受け入れ状況

()内は台湾からの受け入れ

年度	学校数 (校)	人数 (人)	年度	学校数 (校)	人数 (人)
平成 19 年度	1	40	平成 26 年度	5(1)	233
平成 20 年度	2	108	平成 27 年度	5(2)	241
平成 21 年度	4	239	平成 28 年度	3	177
平成 22 年度	6	352	平成 29 年度	2	106
平成 23 年度	5	315	平成 30 年度	1	76
平成 24 年度	5(1)	239	令和 元年度	3	172
平成 25 年度	4(1)	219	合計	46(5)	2,517

ウ 泊食分離の宿泊施設（ファミリーロッジ旅籠屋・寒河江店）

滞在型観光を実現するためには、選択可能な宿泊施設が域内にあることが要件となる。そのなかで泊食分離の考え方により、全国的にはアメリカンスタイルの宿泊施設が増加してきている。

(ア) 当宿泊施設の設置スタイル

ホテル業を営む民間事業者が、宿泊施設を建設するオーナーと 20 年間の賃貸借契約を行い、うち 15 年間の家賃保証（ホテル業を営む民間事業者側の事情で途中解約する場合、15 年間の残家賃の総額を違約金として支払う）を行っている。民間事業者の設置要件は規模を 12 室から 14 室程度で、設計業務等は事業者が行い、建設費はオーナーが負担し、修繕等の維持費は民間事業者が負担する。

(イ) 宿泊者の状況と傾向

稼働率はおおよそ 65%で、宿泊者の傾向は主に関東方面が多く、次に宮城県、仙台方面など東北地方が多い。また個人での利用や 2 人以上のグループでの利用、家族連れでの利用などもあり、中にはリピーターや連泊利用者もある。

[課 題]

(1) 観光拠点と観光資源

本町の観光交流人口が 100 万人を超えようとしているなか、観光による経済効果を波及させることが求められている。

しかし、観光客が本町を訪れ消費できる観光拠点施設の充実や宿泊施設などの観光資源の整備が十分でない。

(2) 観光推進体制と魅力の発信

事業を展開する際、迅速な判断や様々な組織との調整が必要であり、そのための観光に特化した組織体制が確立されていない。また、観光拠点や特産品などの魅力を発信できる仕組みが十分でない。

[意 見]

(1) 観光拠点と観光資源

観光振興によって経済効果を波及させるには、中心的な役割を担う拠点が必要である。本町の観光拠点としては、余目地域では新産業創造館クラスセ、立川地域では道の駅しょうない風車市場が考えられる。

この両施設に加え、風車村や月の沢温泉北月山荘周辺は、魅力ある自然環境を備えており、これらを生かし観光客が自由に訪れることができる、新たな拠点としての整備を図るべきである。

ア 風車村

シンボル風車や天体望遠鏡が撤去され、クリーンエネルギーに対する時代背景も大きく変化してきていることから、風の館としたコンセプトも一定の役目を果たしたものとする。観光に特化した事業展開を強化していくうえでも、風車村周辺には、桜まつりで有名な楯山公園や北館神社などがあることから、一帯の名称変更を検討すべきである

例えば、周辺を花の植栽等を中心にして、バッテリーカーを利用した子ども広場の充実や家族で楽しめるキャンプ施設等を整備するなど、立川地域の四季を生かした新たな魅力ある拠点づくりを行うべきである。

また、ウインドーム立川は、建物の特長を生かし周辺施設も合わせた利活用について、外部専門家の意見を参考に検討すべきである。

イ 月の沢温泉北月山荘周辺と立谷沢川流域

これらの地域は、国道 47 号（将来の高規格道路）から清川地区を経由し、さらに出羽三山、鶴岡市内の各施設や新潟県方面、あるいは酒田市方面へとそれぞれのコースを周遊するルート上にある。

これらを踏まえ、旅行会社等と連携して地域全体を周遊観光の立ち寄り拠点とするなど、特長を生かした、地域を元気にする「観光地域づくり」をコンセプトとすべきである。

一方、月の沢温泉北月山荘周辺および立谷沢川流域は、稼げる観光産業づくりにつながる観光拠点としての可能性がある。大自然や周辺施設との相乗効果を生かすために、専門家による観光調査を早急に実施すべきである。

なお、月の沢温泉北月山荘は、冬季間閉館しているが、冬のイベントには一定の発信力もあり、内外のファンの多くからは再開を望む声もある。町は地域おこし協力隊と連携を図りながら事業展開をすべきである。

ウ 宿泊施設

本町では、稼げる観光産業づくりの戦略として宿泊施設の拡充を掲げている。様々な大会参加やビジネス、あるいは観光に訪れた際に利用可能な宿泊施設が他にもあれば、来町者にとって利便性が向上し、経済効果も期待できる。

本町に宿泊施設を建設したいとする民間事業者がある場合は、企業誘致と同様の施策を講ずるべきである。

(2) 観光推進体制と魅力の発信

ア 観光推進体制

視察した木祖村ややまがたアルカディア観光局（長井市）はもとより、令和元年4月には鶴岡市が日本版DMO登録に向けスタートするなど、観光産業の活性化に取り組む自治体が増えてきている。

将来の観光行政の在り方を、特に経済効果を目的に推進しようとした場合、効果を大きく受けるのは民間である。そのため基本的に主体となる推進体制が、行政から観光に特化した民間の組織へと移行することは必然の動きである。

本町の観光推進体制は、予算措置としては観光協会にあるが、実質的には商工観光課が中心となり進められており、民間が協力するというスタイルになっている。

しかし、稼げる観光産業づくりを目指すためには、事業展開をする際の迅速な判断や多様な組織との調整が欠かせない。

そのためには、法人化が良いのか、あるいは組織改編で対応するのか、「WAKUWA KU やまのうち」のような町づくり会社と連携するのかなど、観光に特化した組織形態が考えられるので検討すべきである。

イ 魅力の発信

(ア) 観光案内の充実

視察地の甘楽町をはじめ、拠点施設には、観光客のためのデジタルサイネージ（電子看板）等による魅力発信を行っているところが多い。本町のクラッセには既に整備されているが、道の駅しょうない風車市場をはじめ、観光拠点となりうる施設にも整備すべきである。

また、観光拠点には、観光ガイドの常駐が望ましい。難しいようであれば、現場のスタッフが対応できるよう人材の育成も検討すべきである。

(イ) 特産品の開発

視察地の甘楽町では、優れた商品を「KANRA ブランド認定商品」として認定し、付加価値を高めることで、地域経済の活性化に取り組んでいる。

本町でも、山形県よろず支援拠点の指導を受け、新産業創造協議会のプロジェクトと地域おこし協力隊が開発した「庄内町のほしがきさん」が、2018年やまがた土産菓子コンテストで最優秀賞、2019年新東北みやげコンテストでもデザイン特別賞を受賞し、令和元年12月からはインターネット販売を開始

した。

このように 6 次産業化開発食品を販売ルートに乗せることができれば、庄内町発の特産品としてその魅力を十分発信でき、目指す経済効果も期待できる。本町でも認定基準を設け、庄内町ブランドを確立すべきである。

(ウ) グリーンツーリズム

風車村の農林漁業体験実習館は、宿泊施設としての機能があることから、町外からの関係人口拡大につながる事業展開が可能である。

視察地の「なかつがわ農家民宿組合」の取り組みを参考に、地域一帯を四季折々の自然環境を活用し、教育旅行も含め農業体験プログラム等によるグリーンツーリズムの拠点施設とすべきである。

(エ) 本町のファンづくり

視察地の木祖村では、東海地区村人会の会員として、村出身者以外の方もファンとして登録でき、甘楽町では、友好都市である東京都北区の住民を対象に、公的宿泊施設等の利用料金割引制度を設け、やまがたアルカディア観光局（道の駅川のみなと長井）では、町歩き等の支援をするため、市内の店舗で割引きを受けられるサービス券を交付するなど、それぞれが交流人口あるいは関係人口拡大につなげるためのファンづくりに取り組んでいる。

本町でも、東京庄内会や東京都港区白金との交流事業を、庄内町のファンづくりの好機と捉え、視察地の施策を参考に、交流人口拡大や関係人口拡大につながる新たな支援制度を検討すべきである。

別表1

庄内町観光交流人口(H29・H30)

(人)

分類	名称	H29入込数	H30入込数	H30-H29	H30/H29増加率
名所・旧跡	白狐山光星寺	2,948	8,985	6,037	305.0%
	楯山公園	4,183	4,005	△ 178	96.0%
	熊谷神社	2,456	2,265	△ 191	92.0%
	清河神社	1,654	1,950	296	118.0%
	余目八幡神社	20,000	20,000	0	100.0%
	北館神社	1,900	2,500	600	132.0%
	歓喜寺	650	650	0	100.0%
	御諸皇子神社	350	350	0	100.0%
	熊野神社	100	100	0	100.0%
	霊輝院(三ヶ沢の乳イチョウ)	30	50	20	167.0%
	計	34,271	40,855	6,584	119.0%
美術館・資料館等	響ホール	42,768	30,312	△ 12,456	71.0%
	亀ノ尾の里資料館	2,161	3,981	1,820	184.0%
	歴史民俗資料館	239	306	67	128.0%
	清河八郎記念館	1,654	1,950	296	118.0%
	内藤秀因水彩画記念館	5,287	5,040	△ 247	95.0%
	砂防資料館	379	384	5	101.0%
	耐雪書道美術館	18	20	2	111.0%
	計	52,506	41,993	△ 10,513	80.0%
体験・レジャー	風車村	32,368	28,257	△ 4,111	87.0%
	庄内ゴルフ倶楽部	20,991	19,841	△ 1,150	95.0%
	北月山荘	12,281	11,461	△ 820	93.0%
	農林漁業体験実習館	2,936	814	△ 2,122	28.0%
	大中島自然ふれあい館 森森	1,205	1,269	64	105.0%
	カートソレイユ最上川	4,180	2,546	△ 1,634	61.0%
	セーフティパーク最上川	800	900	100	113.0%
	北月山ケビン・キャンプ場・ロッジ	208	177	△ 31	85.0%
	新産業創造館「クラッセ」	182,170	185,620	3,450	102.0%
	ギャラリー「温泉」町湯	101,030	101,449	419	100.0%
	八幡スポーツ公園	190,034	194,652	4,618	102.0%
計	548,203	546,986	△ 1,217	100.0%	
産直施設等	あまるめホットホーム	15,366	13,522	△ 1,844	88.0%
	道の駅しょうない 風車市場	200,917	205,507	4,590	102.0%
	やまぶどう(北月山荘)	11,604	11,018	△ 586	95.0%
	計	227,887	230,047	2,160	101.0%
祭り・イベント	楯山公園桜まつり	7,000	7,000	0	100.0%
	植木金魚まつり	16,000	16,000	0	100.0%
	夏宵まつり	2,000	8,000	6,000	400.0%
	余目まつり	13,000	13,000	0	100.0%
	しょうない秋まつり	19,000	15,000	△ 4,000	79.0%
	月山龍神マラソン	2,300	2,800	500	122.0%
	月の沢龍神冬まつり	0	1,000	1,000	
	龍神月山	2,000	2,000	0	100.0%
	やままつり	1,000	1,000	0	100.0%
	キャンドルナイトinしょうない	200	50	△ 150	25.0%
	エコランド(旧エコツアー(環境塾))	886	763	△ 123	86.0%
	立谷沢川流域交流事業	5,271	4,057	△ 1,214	77.0%
	JICA青年研修受入事業	41	18	△ 23	44.0%
	明治維新150年記念事業	0	500	500	
	日本一おいしい米コンテスト決勝大会	1,000	1,000	0	100.0%
	一店逸品招待ツアー	20	20	0	100.0%
	着地型、ガイドツアー	372	531	159	143.0%
	たべぶらパスポート	1,990	1,750	△ 240	88.0%
	月山インバウンドジオツアー	25	0	△ 25	33.0%
	計	72,105	74,489	2,384	103.0%
	宿泊施設	余目ホテル	8,124	7,057	△ 1,067
民宿ふじ					
民宿ふきのとう					
長村旅館					
ビジネスホテル泉					
北月山荘					
余目第四公民館					
平成館					
民宿源助					
合計	943,096	941,427	△ 1,669	100.0%	

庄内町商工観光課調べ

H25入込数	H26入込数	H27入込数	H28入込数
331,388	709,845	810,429	857,847

別表2

平成30年度庄内町観光協会 一般会計収支決算書

《 収 入 》

(単位：円)

項 目	予算額	決算額	比較増減	摘 要
1 会 費	704,000	709,000	5,000	1号会員 87団体×@4,000円 = 348,000 2号会員 114自治会×@2,000円 = 228,000 6 商店会×@2,000円 = 12,000 3号会員 121名×@1,000円 = 121,000
2 負担金	9,740,000	9,740,000	0	町負担金 9,140,000 余目町農業協同組合 200,000 庄内たがわ農業協同組合 200,000 庄内町商工会 200,000
3 委託金	8,230,000	8,230,000	0	庄内町観光開発育成事業委託金
4 寄付金	1,000	0	△ 1,000	
5 広告料	2,500,000	2,345,000	△ 155,000	企業等協賛広告料
6 繰越金	2,163,340	2,163,340	0	
7 雑収入	142,660	205,407	62,747	特別会計繰入金142,566円 預金利息 等
収入合計	23,481,000	23,392,747	△ 88,253	

《 支 出 》

(単位：円)

項 目	予算額	決算額	比較増減	摘 要
1 会議費	140,000	110,928	△ 29,072	総会 99,846 理事会 11,082
2 事務費	200,000	15,947	△ 184,053	消耗品費 15,947
3 事業費	22,621,000	21,052,269	△ 1,568,731	別紙事業費内訳のとおり
4 負担金	147,000	145,028	△ 1,972	(社)山形県観光物産協会 51,732 庄内観光コンベンション協会 30,432 やまがた観光キャンペーン推進協議会 32,432 山形県教育旅行誘致委員会 30,432
5 交際費	20,000	24,500	4,500	
6 旅 費	100,000	62,000	△ 38,000	理事会、専門部会 等 62,000
7 雑支出	90,000	24,483	△ 65,517	テント保険料 等 24,483
8 予備費	163,000	0	△ 163,000	
支出合計	23,481,000	21,435,155	△ 2,045,845	

収入合計 23,392,747 支出合計 21,435,155 = 1,957,592 円
(次年度へ繰越し)

平成30年度庄内町観光協会一般会計収支決算事業費内訳

1 主催事業

(単位：円)

事業名	予算額	決算額	比較増減	備 考
楯山公園桜まつり	870,000	738,095	△ 131,905	総事業費 2,367,495円
植木金魚まつり	400,000	349,745	△ 50,255	総事業費 459,745円
夏宵まつり	2,900,000	3,021,513	121,513	総事業費 3,220,413円
しょうない秋まつり	2,900,000	2,847,654	△ 52,346	総事業費 3,147,854円
月山龍神マラソン	1,000,000	765,454	△ 234,546	総事業費 8,837,954円
月の沢龍神冬まつり	1,000,000	684,811	△ 315,189	総事業費 717,924円
計	9,070,000	8,407,272	△ 662,728	

2 後援事業

事業名	予算額	決算額	比較増減	備 考
余目まつり	761,000	761,418	418	大行列 171,000 相撲大会 300,000 カラオケ大会 256,000 交通安全対策費 34,418
庄内飛龍會	280,000	280,000	0	
やままつり	20,000	20,000	0	
モーターレク開発	170,000	170,540	540	
日本一おいしい米コンテスト	45,000	45,000	0	
2018全日本カート選手権	95,000	95,000	0	
龍神月山	500,000	500,864	864	
歩いて楽しむ回天の道と清川歴史の旅	150,000	150,000	0	H30年度は1回開催
戸沢村・庄内町連携事業	50,000	0	△ 50,000	
Show Naight	50,000	50,000	0	
【新規】明治維新150年記念事業	100,000	100,000	0	新規事業 (H30年度限定)
計	2,221,000	2,172,822	△ 48,178	

3 本部事業費

事業名	予算額	決算額	比較増減	備 考
観光開発育成事業	8,230,000	8,230,012	12	観光専門員2名 JR余目駅観光インフォメーション運営委託
グリーン・ツーリズム交流事業	200,000	138,344	△ 61,656	補助金、旅行サービス手配業登録料
観光ガイド育成事業	60,000	60,000	0	2団体×30,000円
山形日和推進事業	730,000	180,679	△ 549,321	PR費等 12,960 北月山荘PR事業 49,000 【新規】新潟庄内DC事業 118,719
広域観光推進事業	400,000	349,483	△ 50,517	月山広域事業(ハス1回) 98,258 その他広域観光事業 251,225
観光物産展事業	280,000	231,599	△ 48,401	白金アザ天の川螢祭り 76,581 全国交流物産展in新橋 78,916 南三陸町産業フェア 他 76,102
観光イベント情報誌発行事業	430,000	505,327	75,327	イベント情報誌製作代 等 505,327
広報宣伝費	800,000	598,319	△ 201,681	写真コンテスト等 343,031 新聞広告 等 255,288
観光レンタサイクル事業	200,000	178,412	△ 21,588	新規自転車購入 178,412
計	11,330,000	10,472,175	△ 857,825	
事業費合計	22,621,000	21,052,269	△ 1,568,731	

別表3

令和元年度庄内町観光協会 一般会計収支予算書

《 収 入 》

(単位：円)

項 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	摘 要
1 会 費	709,000	704,000	5,000	1号会員 87団体×@4,000円 = 348,000 2号会員 114自治会×@2,000円 = 228,000 6 商店会×@2,000円 = 12,000 3号会員 121名×@1,000円 = 121,000
2 負担金	9,680,000	9,740,000	△ 60,000	町負担金 9,080,000 余目町農業協同組合 200,000 庄内たがわ農業協同組合 200,000 庄内町商工会 200,000
3 委託金	8,230,000	8,230,000	0	庄内町観光開発育成事業委託金
4 寄付金	1,000	1,000	0	
5 広告料	2,400,000	2,500,000	△ 100,000	企業等協賛広告料
6 繰越金	1,957,592	2,163,340	△ 205,748	
7 雑収入	12,408	142,660	△ 130,252	預金利息 等
収入合計	22,990,000	23,481,000	△ 491,000	

《 支 出 》

(単位：円)

項 目	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	摘 要
1 会議費	140,000	140,000	0	総会 120,000 理事会 20,000
2 事務費	50,000	200,000	△ 150,000	消耗品費 50,000
3 事業費	22,461,000	22,621,000	△ 160,000	別紙事業費内訳のとおり
4 負担金	147,000	147,000	0	(社)山形県観光物産協会 52,000 庄内観光コンベンション協会 31,000 やまがた観光キャンペーン推進協議会 33,000 山形県教育旅行誘致委員会 31,000
5 交際費	20,000	20,000	0	
6 旅 費	100,000	100,000	0	理事会、専門部会 等 100,000
7 雑支出	50,000	90,000	△ 40,000	郵送料、テント保険料 等
8 予備費	22,000	163,000	△ 141,000	
支出合計	22,990,000	23,481,000	△ 491,000	

収入支出差し引き残金なし

令和元年度庄内町観光協会一般会計収支予算事業費内訳

(単位：円)

1 主催事業

事業名	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
楯山公園桜まつり	1,000,000	870,000	130,000	テントレンタル料金増額
植木金魚まつり	400,000	400,000	0	
夏宵まつり	3,000,000	2,900,000	100,000	
しょうない秋まつり	3,000,000	2,900,000	100,000	
月山龍神マラソン	1,000,000	1,000,000	0	
月の沢龍神冬まつり	0	1,000,000	△ 1,000,000	
【新規】龍まちっくプロジェクト	1,000,000	0	1,000,000	
計	9,400,000	9,070,000	330,000	

2 後援事業

事業名	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
余目まつり	761,000	761,000	0	大名行列 171,000 相撲大会 300,000 カラオケ大会 256,000 交通安全対策費 34,000
庄内飛龍會	100,000	280,000	△ 180,000	飛龍リニューアルプロジェクト
ややまつり	20,000	20,000	0	御祝い
モーターレク開発	170,000	170,000	0	
日本一おいしい米コンテスト	45,000	45,000	0	
2019全日本カート選手権	95,000	95,000	0	
龍神月山	500,000	500,000	0	
歩いて楽しむ回天の道と清川歴史の旅	150,000	150,000	0	
Show Naight	0	50,000	△ 50,000	
戸沢村・庄内町連携事業	0	50,000	△ 50,000	
明治維新150年記念事業	0	100,000	△ 100,000	
【新規】清河八郎西遊草発行事業	200,000	0	200,000	
計	2,041,000	2,221,000	△ 180,000	

3 本部事業費

事業名	本年度予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
観光開発育成事業	8,230,000	8,230,000	0	観光専門員2名 JR余目駅観光インフォメーション運営委託
グリーン・ツーリズム交流事業	100,000	200,000	△ 100,000	補助金
観光ガイド育成事業	60,000	60,000	0	2団体×30,000円
山形日和推進事業	400,000	730,000	△ 330,000	PR費等 100,000 北月山荘PR事業 100,000 新潟庄内DC事業 200,000
広域観光推進事業	350,000	400,000	△ 50,000	月山広域事業 100,000 その他広域観光事業 250,000
観光物産展事業	280,000	280,000	0	白金がた天の川蜃祭り 180,000 全国交流物産展in新橋 50,000 南三陸町産業フェア 他 50,000
観光イベント情報誌発行事業	600,000	430,000	170,000	イベント情報誌作成、協賛企業謝礼
広報宣伝費	950,000	800,000	150,000	写真コンテスト 100,000 ポスター作製 500,000 新聞広告 等 350,000
観光レンタサイクル事業	50,000	200,000	△ 150,000	
計	11,020,000	11,330,000	△ 310,000	
事業費合計	22,461,000	22,621,000	△ 160,000	

視察地 群馬^{かんら}県甘楽^{かんらまち}郡甘楽町
甘楽ふるさと農園
甘楽亭
御殿前レストラン「プレトリオ」
国指定名勝「楽山園」
長岡今朝吉記念ギャラリー
甘楽ふるさと館

1 視察年月日 令和元年6月26日

2 視察の目的

本町の観光交流人口が100万人を越えようとする中、観光収入、経済効果が十分といえない。そこで経済効果を地域内への幅広い産業に波及させるため、甘楽町の観光交流人口拡大、観光収入を増やすための取組について調査することとした。

3 視察地の概況（平成31年4月18日現在）

- (1) 人口 13,185人
- (2) 世帯数 5,020世帯
- (3) 面積 58.61km²
- (4) 財政規模 5,282,000千円（令和元年度一般会計当初予算）
- (5) 町勢

甘楽町は、群馬県の西南部、甘楽郡に属する町である。1615年織田信長の次男信雄による甘楽町（小幡藩）の統治が始まり、以後8代152年にわたり織田氏の統治が続いた。

織田氏が築いた大名庭園「楽山園（国指定名勝）」や「雄川堰（世界かんがい施設遺産・名水百選）」、武家屋敷などが今でも往時を偲ばせており、織田宗家の歴史が今も漂う城下町である。

昭和中期ごろまで養蚕が盛んであったが、昭和後期から平成にかけて野菜・果樹の生産量が増加し、キウイフルーツの特産地となっている。隣接自治体は高崎市、藤岡市、富岡市、甘楽郡下仁田町である。

4 取り組みの現況

(1) 甘楽町の観光振興

ア 観光メニュー

さくら祭「武者行列」が最大のイベントで、総勢250人の行列の戦国絵巻、毎年3万人以上の集客である。今年は特別ゲストにタレントを呼んで400人の行列、3万5千人の人出で賑わった。3月～5月、甘楽町が一番輝く時期に「キラッと

んら観光キャンペーン」を展開し、県内外に魅力を発信し交流人口の増加、経済の発展につなげられるように毎年開催している。夏は、夏祭り盆踊り大会と花火、秋にはもみじウォークと続く。

イ 映像による町の紹介として、町のホームページ、楽山園、道の駅等町内の観光施設で放映している。

ウ 観光 PR は、東京都北区と友好都市協定を締結している市町村と協力して特産品の販売や PR、体験イベントなどを開催している。

エ 特産品づくり

(ア) 甘楽町新商品研究開発支援助成金交付事業とは、甘楽町をイメージするような新商品の研究開発に要する経費の一部として、50 万円以内を補助。これまで約 30 品目が認定されている。

(イ) 産（一般財団法人甘楽町都市農村交流協会）、官（産業課）、学（富岡実業高校）との連携で、高校生が考案した桑茶ソフトクリームが道の駅で好評。また、高校生がさくら祭「武者行列」に参加したり、産業文化祭等のイベントに授業で生産した作物等を出店したりしている。

(ウ) KANRA ブランド認定商品は甘楽町の優れた産品を掘り起こし、ブランド商品として認定することで付加価値を高め、町内外に PR することにより地域経済の活性化と町のイメージアップを図ることを目的に、要綱を設定して実施している。現在、審査の結果 6 品目が認定されている。

オ 観光協会、商工会、第 3 セクター等との連携

(ア) 観光協会については町が事務局を担当し、運営を行っている。

(イ) 商工会については各イベント時に協賛や出店等連携し進めている。

(ウ) 一般財団法人甘楽町都市農村交流協会の担当職員を配置し、「甘楽ふるさと館」や「道の駅甘楽」等の施設を運営している。また、東京都北区と友好都市協定を締結しており、共同で運営している。

カ NPO 法人「自然塾寺子屋」

平成 15 年に設立され、青年海外協力隊（JICA）の研修受け入れ等、国際協力活動を中心に自主的に各種ワークショップの活動を行っている。町とのかかわりについては、古民家カフェ「信州屋」を指定管理者として運営している

(2) 道の駅甘楽

「ここから出発！甘楽の味と歴史の散歩道！」と銘打ち、農特産品の買物、食事、城下町小幡の歴史散策や観光案内など、甘楽町の玄関口の役割を持たせている。

ア 農特産物・土産品

四季折々の新鮮な農産物、果物、ふるさとの手づくり食品やコンニャク、味噌、リンゴジュース、漬物など農産加工品、お土産の販売を行っている。

イ 食堂

ふるさとの味を味わっていただくという食事では、季節ごとの旬の味と香りのきじ肉、もちきびを使った名物桃太郎ごはんの弁当と各種定食、上州牛のすき焼き定食、お切り込みうどん、そばなど甘楽の味が楽しめるバラエティー豊かなメニューとなっている。客席（テーブル・和室）、団体グループのご予約もでき、

桃太郎弁当などの配達も行っている。

ウ イタリア直輸入ワイン等

友好姉妹都市イタリアチェルタルド市から直輸入し、日本ではここだけでしか手に入らないキャンティワイン等やエキストラ・バージン・オリーブオイル、バルサミコ酢、ワインビネガーを販売している。

エ 観光案内

城下町小幡の家並みと日本名水百選の雄川堰、武家屋敷、国指定名勝楽山園、小幡藩邸跡など、道の駅甘楽を起点として歴史と自然散策のお手伝いとして、観光案内人（有料）も依頼できる。

オ 商品券販売

記念品や贈答用として利用できる商品券を、「道の駅甘楽」および「甘楽ふるさと館」で発売している。

(3) 甘楽ふるさと農園（平成 12 年 4 月開園）

甘楽ふるさと農園は、農地を借りて有機農業体験ができる施設である。富岡インターから 8 分というアクセスの良さに加え、晴れていれば赤城・榛名・妙義の上毛三山、浅間山などをぐるりと一望できるという開放的な場所にある。

また、ただ土地を貸すだけではなく「地元の人やオーナー間の交流を楽しめる」というコンセプトで、一度だけ来て去ってゆく観光ではなく、度々来て地域と触れ合いを持つ新しい観光スタイルを提案している。100 区画以上ある農地のうち、約 37%を東京近郊の方が、残りを地元の方が借りていて、週末は賑わいを見せている。

また、西側の斜面には羊が放牧され、可愛らしいと好評である。

ア 農園面積 31,352 m²

休憩棟付農園（バス・トイレ・流し台あり）※光熱水費は別途必要	農園面積 300 m ² ×13 区画 （内休憩棟 30.6 m ² ）	年額 240,000 円
グループ農園	農園面積 300 m ² × 5 区画	年額 60,000 円
大区画農園	農園面積 150 m ² ×47 区画	年額 30,000 円
小区画農園	農園面積 80 m ² ×50 区画	年額 16,000 円

イ 施設

(ア) クラブハウス 245m²（管理人が常駐）

a 研修室兼休憩室（ラウンジ） 60 m²

b 調理室（1 時間 600 円） 20 m²

c 男女別シャワールーム（200 円/回） 各 20 m²

(イ) 駐車場 80 台分 1,800 m²

(ウ) 貸出用農機（1 時間 500 円・小農具は無料）

ウ 事業費

総額 187,443 千円（補助金比率は、国が 50%・県が 15%）

(4) The Hotel かんら 甘楽亭

「甘楽亭」は、町全体をホテルに見立て、農業・生活体験型観光を移住へと転換させることを目指した『The Hotel かんらプロジェクト』の一環の施設である。ここは空き家を改装し客室として一棟貸しする旅館であり、観光スポットに囲まれ

た閑静な住宅地に位置している。

ア 1泊1棟の料金（すべて素泊まり）

- | | |
|--------------|---------|
| (ア) 1・2名での利用 | 8,000円 |
| (イ) 3名での利用 | 9,000円 |
| (ウ) 4名での利用 | 10,000円 |
| (エ) 5名での利用 | 11,000円 |
| (オ) 6名での利用 | 12,000円 |

イ 設備・備品

浴室・トイレ・キッチン・冷蔵庫・炊飯器・電子レンジ・食器・洗濯機・テレビ・布団・シーツ・アメニティ（フェイスタオル・シャンプー・歯ブラシ等）である。ただし、バスタオル、寝まき（パジャマ）の用意は各自で、Wi-Fiなどのインターネット環境はない。

ウ 利用方法

- (ア) 企画課企画調整係まで電話にて予約。
- (イ) 宿泊日当日は、入室前に役場へ立ち寄り入室カードに記入し、鍵を受け取る。（宿までご案内）
- (ウ) 退室時は役場に鍵を戻す。

(5) 御殿前レストラン「プレトリオ」

江戸時代の面影が残る小幡地区の民家を改修した本格イタリアン料理が味わえる御殿前レストランPRETORIO(プレトリオ)。店名は、甘楽町の友好姉妹都市であるイタリア・チェルタルド市の旧城郭にある「プレトリオ宮殿」の名前に由来している。地場産野菜とイタリア料理がコラボして地域・人・食をつなぐ。

農林水産省の農山漁村振興交付金事業として工事・運営が進められ、観光振興地元農産物の消費拡大、雇用の創出など多くの期待が寄せられている。

ア 定休日：毎週火曜日

イ 営業時間：11：00～16：00

夜間は、予約制

(6) 国指定名勝「楽山園」

楽山園は、江戸時代初期に織田氏によって造られた、小幡藩二万石の藩邸に付属する群馬県内唯一の大名庭園である。池泉回遊式の借景庭園で、「戦国武将庭園」から「大名庭園」へと移行する過渡期の庭園と位置付けられ、京都の桂離宮と同じ特色がある。景石（けいせき）の置かれた池を中心として、「中島」や「築山」を築いて起伏のある地形を造り出し、「梅の茶屋」や全国的にも珍しい五角形の形状をした「腰掛茶屋」など複数の茶屋を配し、それらを巡る園路にも工夫を凝らしている。主な復元建築物は、梅の茶屋（平成17年度）、腰掛茶屋（平成17年度）、土橋・土堀・井戸（平成18年度）、拾九間長屋（平成19年度）、庭門（平成20年度）、北裏門・管理門（平成21年度）、中門（平成22年度）である。

”平和の始まり”を意味する「元和（げんな）」元年（1615）に小幡の地を拝領した織田信雄。戦乱の世を駆け抜け、ようやく訪れた天下泰平の世に築いた楽山園には、世の平和と領民の安心を願う気持ちが込められている。

ア 指定年月日 平成 12 年 3 月 30 日 国指定名勝 面積 23,437.33 m²

イ 開園年月日 平成 24 年 3 月 24 日

ウ 観覧料

(ア) 高校生以上／300 円 (団体 20 人以上／250 円)

(イ) 中学生以下／無料

エ 3 館共通券 (3 館とは楽山園・歴史民俗資料館・記念ギャラリー特別展示)

(ア) 当日有効券 高校生以上／500 円 (団体 20 人以上／400 円)

(イ) 年間有効券 高校生以上／1,000 円 (1 年間何度でも入園・入館できる
パスポート)

(7) 長岡今朝吉記念ギャラリー

長岡今朝吉記念ギャラリーの展示室では、長岡今朝吉名誉町民から寄贈された
絵画 96 点を 30 点程度順次展示を行っている。絵画のほか地元の食材を使った 2
種類のスパゲティやソフトドリンクが楽しめる軽食喫茶コーナーがあり、名勝
「楽山園」に隣接し眺望を楽しむこともできる。入場料は無料だが、特別展示品
の観覧は有料。ギャラリー内にある喫茶コーナーでは、国指定名勝「楽山園」が
眺められるテラスで、コーヒー、特産のリンゴジュース、土日限定で、オリジナ
ルの「信雄 (のぶかつ) サンド」を販売している。

(8) 甘楽ふるさと館

甘楽ふるさと館は、雄川のせせらぎを見下ろす、緑ゆたかな甘楽総合公園に隣
接しており、スポーツに、合宿に、ふるさと体験と、豊かな自然のなかで、田舎
の暮らしを思いっきりエンジョイできる施設である。昔からこの地方で盛んな養
蚕農家をモチーフとした天窓のある瓦屋根が特徴的で、上州和牛を使ったバーベ
キューやマスのつかみ取り体験、手作りならではのこんにゃく作りなどが体験で
きる。料理は、山菜や川魚をはじめ、季節ごとの旬の味を楽しめる。

また、東京都北区とは友好都市であり、戦時中の疎開先という縁もあり、保養施
設となっている。

ア 設備

(ア) 宿泊室：和室 15 室／洋室 3 室 (シングル 2 室、ツイン 1 室)。宿泊人数は 83
人で全室テレビ付き、冷暖房完備、全室トイレ付

(イ) 装備品：浴用タオル、歯ブラシ、浴衣、ヘヤードライヤー (無料貸出)、バス
タオル (有料貸出)

(ウ) 研修室／ふれあいの間／かたらいの間／もみじの間

(エ) 食堂／屋外バーベキューガーデン／屋外炊事場

(オ) ロビー売店 営業時間：7～21 時

(カ) 浴室：男女 (各 1) / 囲碁 (無料)、将棋 (無料)、麻雀 (有料)、自転車 (無
料)

(キ) 全天候型テニスコート (有料)

(ク) 野球場及びサッカー場は、町教育委員会へ申込み (有料)

イ 宿泊料金

料金 (1 泊 2 食付) と休憩 (日帰り入浴) 料金 (税込み)

区分	宿泊（1泊）		日帰り入浴	
	大人	小人（3歳以上 中学生以下）	大人	小人（3歳以上 中学生以下）
東京都北区の住民	5,400円	4,104円	324円	162円
一般	7,020円	5,940円	540円	324円

5 考察

甘楽町には、温泉がなく、また民間の宿泊施設もないというなかで観光産業に取り組んでいる。観光施設をおおむね4キロ圏内にまとめ、徒歩で2時間または3時間で城下町を見学できるモデルコースを設定している。

甘楽町の観光地案内、PRにおいては映像放映を有効に活用しており、町のホームページはもちろんのこと、道の駅をはじめ名所各地で観ることができた。スマホでのチェック等、他の観光施設への誘客に効果がでていと担当係から話があった。本町の場合、甘楽町より観光地がコンパクトではない分、動画での紹介は、より効果が見込まれる。駅前のクラッセを起点に、道の駅や温泉施設はもとより、今後は人の集う図書館や記念館等で積極的に活用すべきである。

甘楽町では「KANRA ブランド商品」を認定し宣伝していた。認定条件は、町内に活動拠点を有する事業者またはその他町長が認めた事業者等で、1年以上の販売実績があり、原材料の一部が町内産、製造・生産場所を町内に限定し、その他町の認知度向上に寄与する商品を対象としている。また、審査員は消費者目線を重視するため女性が多いなど、本町の特産品作りにおいて、たいへん参考になる事例であった。

「The Hotel かんらプロジェクト」の甘楽亭は、空き家を耐震補強等改築したもので、年間100万円以上の維持経費が必要とされるなか、現況では黒字化は難しいとの説明であった。現在は町直営で運営しており、民間の受け手がまだ見つかっていないことが課題であった。

本町では、空き家を移住促進として活用しているが、宿泊施設としての利用は維持経費等の精査が必要なため、現在進めている宿泊施設の誘致に期待したい。

甘楽ふるさと農園は、利用が多かった団塊世代の高齢化と定年延長などにより、利用者の減少はあるものの、首都圏と近い地の利を生かし、有機農法と魅力ある施設で今後も需要が見込まれる。

本町の場合、市民農園的事業としては、農業を基幹産業としているうえに町なかにおいても農地が多く、農地の供給のほうが上回っている現状がある。参考事例にはなかったが甘楽町と同じく、名水百選・世界かんがい施設遺産登録の町である。こちらは市民農園的事業とは別の、おいしい米の主産地として、立谷沢川の名水が遺産登録かんがい施設によって、おいしい米のルーツ「亀の尾」を生み、おいしい米の大産地であるというさらなるPRを行うべきである。

今回の視察先は、首都圏から近いという地理的な部分で、本町との差異が大きい。庄内町まで車（バス）や列車では時間がかかり、飛行機はチケット代が高いというジレンマがあった。そのようななか、本年8月よりLCC（格安航空会社）が庄内空港に就航となる。一日一往復、午後に運行のため日帰りができないなど不便であるが、逆

に庄内に滞在していただくチャンスでもある。本町としても、LCC や新潟県・庄内エリア デスティネーションキャンペーンと連携しつつ、交流人口の拡大につとめたい。

時間の関係で外から見学しただけであったが、甘楽町の観光の一翼を担っているのが、(株)ヨコオデイリーフーズ運営の「こんにやくパーク」である。年間来場者数は100 万人で、世界遺産の富岡製糸場を上回っている。工場見学のほか、ゼリーやこんにやくを作る体験コーナーがあり、こんにやくスイーツのバイキングなど和食こんにやくの文化と美味しさを伝える目的で作られた施設で、工場から出る蒸気でお湯を沸かした足湯、コンビニの併設、地元の特産物等も販売し集客につとめている。群馬県はこんにやくの生産が日本一であり、一企業が名産品をパーク化するという成功事例は、特筆すべきことであった。

さらに、甘楽町では道の駅の食堂のメニューに、地元店と競合しないようラーメンとカツ丼は提供していない。このような町の配慮は、行政主導の施設において、本町でも参考すべきことである。

視察地 長野県木祖村
一般社団法人 木祖村観光協会

1 視察年月日 令和元年 6 月 27 日

2 視察の目的

平成 30 年 3 月に策定した第 3 次庄内町観光振興計画では「稼げる観光産業づくり」を主要施策として掲げている。

本町の観光交流人口が 100 万人を超えようとするなか、観光収入、経済効果が十分とは言えない。そこで経済効果を地域内への幅広い産業に波及させるため、既に観光協会を一般社団法人化している長野県木祖村の取り組みを調査することとした。

3 視察地の概況 (令和元年 6 月 1 日現在)

- (1) 人 口 2,859 人
- (2) 世 帯 数 1,118 世帯
- (3) 面 積 140.50 km²
- (4) 財政規模 1,832,036 千円 (令和元年度一般会計当初予算)
- (5) 町 勢

村名は、木曽郡を縦断する木曽川の源流の地であることから、木曽の祖という意味を込めて名付けられた。

木曽谷に中央西線や国道 19 号線が開通し、主力産業の木工産業を中心に栄え、また昭和初期に開設された藪原スキー場は(現やぶはら高原スキー場)中京方面からの多くの観光客が訪れ、観光産業も昭和初期より盛んにおこなわれており、名古屋市内には村単位では珍しい、アンテナショップを開設している。

観光のみならず、現在では中央高地特有の気候を利用した高原野菜の生産も盛んとなっている。

4 取り組みの現況

(1) 法人化の背景

観光産業を取り巻く環境は大きく変わってきており、消費者ニーズの多様化・高度化が進み、作れば売れる時代ではなくなっている。地方創生が各地で進むなか、選ばれる本物の商品・サービスが求められている。

観光客数の減少は厳しい状況にあり、村の観光産業のテコ入れになると思われる観光協会の法人化は、会員からの声に加え、唐澤一寛村長の選挙公約でもあり、議論が進められた経緯がある。

法人化し経営の視点に立った地域づくりのかじ取り役としての期待もあり、「点から線へ、線から面へ」を合言葉に、観光による地域経済の活性化、雇用創出などを図り将来、木祖村の地域創生の大きな柱となることを目指している。

同じ木曾郡内では、平成 28 年 4 月の上松町観光協会を皮切りに、木曾町、王滝村で組織する「木曾おんたけ観光局」も一般社団法人となっている。

(2) 法人化後の主な取り組み

平成 29 年 10 月に一般社団法人木祖村観光協会として設立され 1 年 9 箇月（視察調査時点）が経過している。これまで重点的に実施してきた木曾川上下流交流事業の継承や、小さいながらも各事業者と連携し県内外での営業活動もおこない四季折々の自然体験ツアーを実施し、法人らしい取り組みも進めてきている。

ア 冬季観光

昭和 6 年に開設した藪原スキー場（現やぶはら高原スキー場）は入込数が前年（平成 29 年度）対比で 91.3%と減少傾向ではあるものの、今もなお冬期間の主力観光産業となっている。

イ 通年観光

以前は、スキー場を核とした観光産業が中心だったが、現在は村内の豊かな自然を活用したアウトドア産業が盛んになっている。

やぶはら高原こだまの森では、キャンプ場としての機能はもちろんのこと、国内最大級のウンテイの設置、親水プールやテニスコートを配置するなど、近年はアウトドア産業の中心として好評を得て、入込数は前年（平成 29 年度）対比で 112.3%となっている。その他、奥木曾湖や水木沢天然林なども入込数は増加しており、村全体の入込数を支えている。

ウ 道の駅

木曾川源流の里きそむら道の駅は、標高 942m に位置し、標高を生かして栽培した高原野菜の産直が好評となっている。施設内の食堂は、地元の特産を使用したメニューが豊富で国道 19 号線沿いという立地も生かされ、木曾路に行く営業マンやトラック運転手などで連日にぎわっており、年間 92,946 人（平成 30 年度）が利用している。

施設名	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	前年度対比
こだまの森	55,747	62,222	53,964	48,566	54,550	112.3%
スキー場	77,198	56,600	67,954	64,657	59,013	91.3%
道の駅	70,784	77,352	88,060	90,400	92,946	102.8%
鳥居峠	11,970	16,445	16,841	17,000	9,401	55.3%
奥木曾湖	8,154	7,818	8,853	7,570	10,210	134.9%
水木沢天然林	3,212	3,962	3,552	2,525	4,116	163.0%
合計（人）	227,065	224,399	239,224	230,718	230,236	99.8%
うち宿泊者数	16,770	18,007	18,921	16,384	21,419	130.7%
観光消費額 （千円）	—	—	813,500	880,096	913,072	103.7%

(3) 各種事業

ア 主な公益目的事業

(ア) 木曽川上下流交流事業

(イ) 愛知県日進市との友好自治体提携

a 昭和 59 年に商工会青年部の交流をきっかけに両商工会の姉妹提携を結び、平成 4 年に友好自治体提携に至った。

b 友好自治体となったことから、夏のキャンプ、冬のスキーなど、四季を通じて相互のイベントに参加することなどから、日進市では木祖村に宿泊する際には市民一人当たり 2000 円の助成を行っている。

(ウ) やぶはら高原スキー場、こだまの森を中心とした県内外での営業活動

(エ) 各種修学旅行、大学のフィールドワークの受け入れ

(オ) ツアー受け入れ幹旋(自然散策や味噌川ダム見学等)

イ 主な収益事業

(ア) 名古屋市昭和区のアンテナショップ「源気屋桜山店」の運営

(イ) 物産展の開催(東京、愛知、県内にて 20 回)

(4) 木祖村名古屋総合拠点施設

木祖村名古屋総合拠点施設(アンテナショップ)では、特産品販売を含む積極的な誘客促進、都市部との交流事業強化、ニーズの把握と観光客の受け入れ環境整備をしながら入込客数や観光消費の増加を目指している。

具体的な目標値にはまだ達していないが、販売収益の増加、積極的な営業活動による誘客数値の把握など、少しずつ成果もあげられるようになってきている。その他、東京都中央区銀座、名古屋市栄区、大阪市北区に情報発信、収集の拠点がある。

(5) 東海地区木祖村人会

平成 22 年に東海地区在住の木祖村出身者を対象に「東海地区木祖村人会」が発足された。現在の会員は 134 人で、村外出身者は約 40 人となっている。

木祖村出身者以外でも、旅行で訪れた経験のある方なども会員となっており、物産展での協力やイベント交流も盛んで、交流人口拡大につながっている。

(6) 法人化の成果、課題

ア 法人化のメリット、成果

これまでの行政中心の観光施策は、予算だけで動く傾向があり、あまりニーズ等にこだわらなかったため、動きが鈍いこともあった。法人化してからは経営的な視点で幅広く事業展開ができるようになり、きめ細かに、また早い対応での営業活動も可能になった。

もともと国道 19 号線、中央自動車道や JR 中央線が利用可能な交通の便がいいところなので、積極的な情報発信ができるようになった。

イ 法人化後の課題

名古屋市に観光に関する総合拠点があることや、木曽川水系の地域とのかかわりが大きかったことから、交流人口の中心が中京圏に偏る傾向にあった。会員からは新たな誘客措置として、地理的にもあまり遠くないことから、関東圏からの

誘客力を置いてほしいとの声がある。

法人化したことから、旅行業の免許を取り誘客に繋げるべきとの声もあるが、いわゆる会社化して経費を掛けるより、各拠点を現状のスタイルで活用して観光客の増加を目指したい。しかし将来的な旅行業の免許取得を否定するものではない。

運営資金についてはまだ村からの交付金が多くを占めている状態となっている。今後はアンテナショップでの収益事業は木祖村の商品だけではなく、近隣自治体との連携で交流商品を強化し、徐々に交付金は減額できるようにしたいと考えている。

また独自の事業として空き家活用による喫茶店などの経営も考えており、収益を確保していきたい。

まだ法人化から2年たっておらず、まずは次年度以降がメリットを感じられるようにしていきたいと考えている。法人としての観光協会の収益より、会員の企業、商店にメリットが出るようにするのが当面の役割と感じている。

5 考 察

長野県木祖村は2000m級の山々に囲まれた山村である。標高の違いはあるが、周辺が森林に囲まれたところは、本町では立谷沢地区に似た環境である。

冬期間のスキー客などで昭和初期から賑わいを見せていたが、入込数では減少傾向にあった。しかし近年は平成8年の味噌川ダム（奥木曾湖）の竣工でやぶはら高原こだまの森、道の駅きそむらなどが観光の目玉となり、通年観光、アウトドアレジャーが盛んになってきた。冬期間の観光に関してはスキー客など、本町と比較できない部分があるが、通年観光と言う考え方は参考にしたい。冬期間は客足が途絶えるとの理由から町の観光施設が営業を休止、または時間短縮を実施する傾向になっていることは、積雪地の魅力をどのようにとらえるか、発信するかを木祖村はもとより、他の積雪地での取り組みも参考にし一考すべきと考える。

特徴的な活動として、「東海地区木祖村人会」があげられる。村外出身者の会員もあり、木祖村ファンをつくり交流人口拡大を図っている。本町では毎年、東京都港区白金においてホテルのイベントをおこなったり、東京庄内会との交流などもあることから、庄内町ファンを拡大するチャンスが多くあるので、参考になると思われる。

観光協会の法人化については、一般社団法人として設立されまだ2年を経過していないことから、具体的な成果はこれからとのことである。しかし、行政が運営の主体であったところと比較すると、経営的視点から事業展開が行えるので、スピード感をもって活動が出来るというメリットがあげられていた。事業の大部分がまだ公益的事業となっているため、協会独自の収益には結びついていない。しかし協会員が経営している観光関連産業の利益につながるところも大きい。次年度以降にはさらにメリットの部分が出るような展開を見込んでいる。庄内町観光協会でも法人化への考えが示されたこともあると聞いているが、視察地の状況を考えた場合、現段階では東北地方また、県内自治体の現況を調査してからでも遅くはないと感じた。

視察地 長野県山ノ内町
観光まちづくり会社 株式会社 WAKUWAKUやまのうち

1 視察年月日 令和元年6月28日

2 視察の目的

平成30年3月に策定した第3次庄内町観光振興計画では「稼げる観光産業づくり」を主要施策の一つとして掲げている。

本町の観光交流人口が100万人を越えようとするなか、観光収入、経済効果が十分とは言えない。そこで経済効果を地域内への幅広い産業に波及させるため調査することとした。

3 視察地の概況

- (1) 人口 12,300人(令和元年7月1日現在)
- (2) 世帯数 4,971世帯
- (3) 面積 265.90km²
- (4) 財政規模 令和元年度一般会計当初予算 6,623,567千円
- (5) 延べ観光客数 平成26年459.3万人⇒平成31年535万人

長野県山ノ内町は、湯量豊富な湯田中渋温泉郷、四季折々の素晴らしい自然に恵まれた志賀高原や北志賀高原からなる県内有数の観光地として知られている。

長野県の北東部に位置し上信越高原国立公園の中心にあり、周囲を山地に囲まれた盆地で山林原野が93%(うち7割余が志賀高原)を占め、集落は河岸段丘や扇状地の緩やかな傾斜地に発達している。

明治22年市町村制の施行で平穏・夜間瀬・穂波の3村によって構成され、昭和29年4月に平穏村が平穏町となり、昭和30年4月に1町2村の合併で山ノ内町になった。

(株) WAKUWAKUやまのうち

- (1) 設立年月日 平成26年4月15日 合同会社
平成27年8月7日 株式会社へ組織変更
- (2) 代表者 代表取締役社長 岡 嘉紀
- (3) 取引銀行 八十二銀行

4 取り組みの現況

(1) 設立の背景・経緯・展開

観光まちづくり会社株式会社WAKUWAKUやまのうちは、観光客の減少を背景に、山ノ内町の地域活性化を目的として、地域金融機関、地元不動産業者や旅館の社長や女将等による合同会社(事務局は八十二銀行)として、平成26年設立した。

その後、担い手や資金、ノウハウなどが不足していたため、ALL信州観光活性化ファンドからの投融資を受けて、株式会社化した。

ア 観光客の減少

スキーブームだった平成2年をピークに観光客は減少し、観光地延べ利用者数はピーク時対比46%となっていた。平成2年985万人→平成26年459万人（うち湯田中渋温泉郷/平成2年223万人→平成26年121万人）

イ 観光資源を活かした地域活性化のための課題

(ア) 地域の課題

- a 担い手不足（若年人口の減少）地域の高齢化が進む。
- b 行政からの補助金等があるうちは良いが、持続できるのか。
（WAKUWAKUやまのうちは、山ノ内町から補助金などを得ていない。）
- c 地域特有のしがらみで、土地の権利関係や人間関係などの地域事情をどうクリアしていくか。
- d 地域間、世代間の確執として、若い人と高齢者、社長間などに価値観の違いがある。
- e 危機意識の共有では、観光客の減少や、後継者問題等について個々の認識に違いがある。
- f 地域の主体者としてリーダーシップを発揮する者が不在であり、誰が覚悟を持ってやるのか。
- g 本気のやる気、覚悟のある人材の有無が重要で、本気度が重要になる。但し、個人がまちづくりのリスクを負うのは難しいため、工夫が必要。

(イ) 外国人観光客の動向

「地獄谷野猿公苑」は、温泉に入る野生の猿「スノーモンキー」が、人間さながらに気持ちよさそうな表情で温泉につかる世界唯一、猿の温泉を撮影できる場所として外国人に人気が高い。年間約8万人(2015年)の外国人観光客が訪れている。山ノ内町全体での外国人延べ宿泊者数は、年間2万7千人程度で、うち湯田中渋温泉郷では1万数千人に留まっている。

観光資源であるスノーモンキーにより外国人観光客が増加するなか、外国人が好む滞在環境（ホテルや飲食店など）が不足しており、観光客を宿泊まで取り込めず近隣の白馬、野沢温泉などに奪われていた。特に欧米からの外国人客は、消費金額が高く地元経済にとってプラスになるにも関わらず、取りこぼしていた。そこで湯田中温泉街を活性化する活動を開始した。

(2) 地域金融機関の支援

八十二銀行他が地域経済活性化支援機構（REVIC）と連携して組成した「ALL信州観光活性化ファンド^{*1}」（平成27年）を活用し、湯田中温泉街の空き店舗等を購入・賃貸して改修後に民間事業者に賃貸するSPC^{**2}を設立した。民間事業者からの賃料収入で投資資金を回収するスキームを構築し、ファンドから投融資を受けるとともに、地域経済活性化支援機構（REVIC）から事業開発等の専門家を招聘している。これにより、閉鎖旅館を改修したホテルや、空き店舗を改修し、地元の発酵食品を提供するレストランやカフェ兼観光案内所が生まれ、外国人を中心に利用客が増加した。

このように、地域金融機関等による面的活性化への投資として資金・人材面の支

援を受け、外国人観光客の好みに合うホステルやレストラン等を再生し滞在環境の整備を図っている。

(株) WAKUWAKUやまのうちを中心に、外国人を含む観光客の増加と、地元にお金の落ちる仕組みを作り、若手起業家による観光まちづくりを推進している。湯田中温泉「かえで通り」は、かつて多くの観光関連店舗が立ち並ぶ通りであったが、観光客の減少や担い手不足によって、空き店舗が多く存在していた。

インバウンド観光客の滞在環境として、案内所、カフェ、ビアバー、レストラン、ゲストハウス^{※3}、B&B^{※4}、情報発信など必要な機能を整備している。

また、あるべき滞在環境として地域に不足しているものを補完するため、既存の旅館等の事業と相乗効果のある施設に投資した。また、その際に、「泊食分離」(宿泊と食の分離)なども取り入れた。

※1 ファンド 複数の投資家から集めた資金で投資を行い、そのリターンを分配する仕組み

※2 SPC 不動産を証券化するなど資金の流動化を目的とした特別目的会社

※3 ゲストハウス 母屋とは別に準備された客人向けの住宅

※4 B&B 比較的低価格の朝食のみ宿泊施設

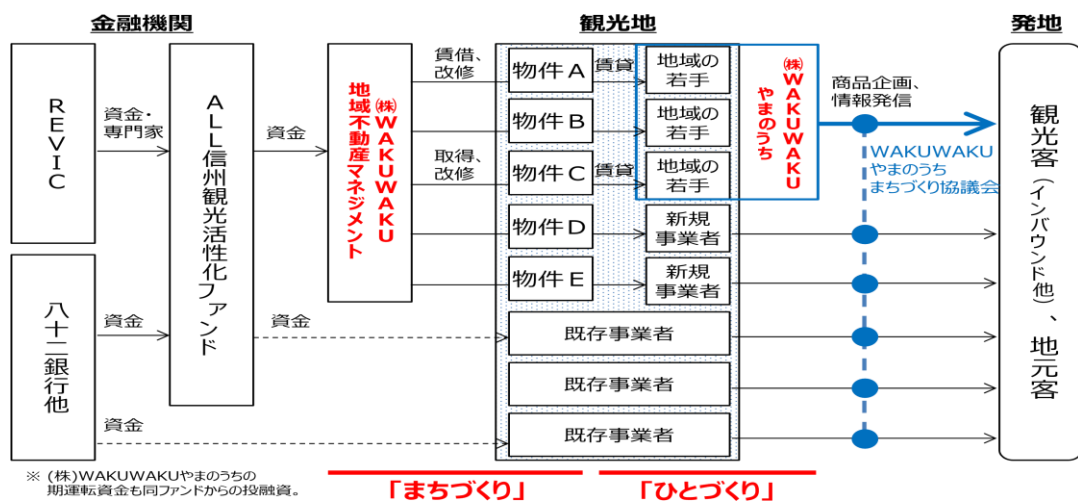
※5 バックパッカー 低予算で個人旅行する旅行者

(3) 事業スキーム

これら取り組みの主体は、直営店舗の運営及びDMC^{※6}としての情報発信等を行う「(株) WAKUWAKUやまのうち」と、未活用物件の取得・改修/賃貸等を行う「(株) WAKUWAKU地域不動産マネジメント」からなる。

- ・所有する人と運営する人を分けることでのリスク分散
- ・再生物件数を複数にして検討する
- ・不動産は金融事業者とともに考えていく
- ・地元の人を巻き込んだ商品企画を行う
- ・担い手づくり→結婚→暮らし(家庭)→仲間(人口)が増える
- ・地域に人がいると様々な視点を情報発信できる

※6 DMC 地域にある観光資源に精通し、地域と協同して観光地域づくりを行う法人
取り組みの全体像



(4) 「まちづくり」の取り組み

ア 遊休物件のリノベーション

旧青果店や旧洋品店、旅館などの遊休物件を活用し、地域の特徴を生かしたりリノベーションによって、必要な機能を補完する店舗をオープンした。

イ 月例のまちづくり委員会（兼協議会—補助金対応組織として）

月に1回「まちづくり委員会」を開催し、地域の方々や専門家の意見を聞きながら、店舗のオープンに向け作業を進めた。メンバーは、旅館社長・女将・不動産業者・地銀支店長・地元事業者・農家・建築士・地元の若手等である。

(5) 「ひとづくり」の取り組み

ア メディア活用

若い力で温泉街を活性化している取り組みを、関東甲信越ニュース、地元テレビ、地方創生関連の特集などで発信、各種経済雑誌・新聞にも掲載される。

イ 経営者人材（雇用主）の育成

地元に着定する地域の担い手を育てるため、起業のプロセスを初期段階の内部事業とし、事業の成長段階での独立も支援するスタンスで運営している。

(6) 情報発信

ア 既存の取り組み

(ア) 周知ときっかけづくり

既存の温泉街に灯りを燈した（やまのうちらんたん等）誘客活動

(イ) 施設の再生

HAKKO - ビアバー&レストラン、CHAMISE - カフェ&レストラン、AIBIYA - ホステル、ZEN - ホステル&カフェ、加命の湯などインバウンド観光客向けの施設を整え、冬季の滞在コンテンツを整備してきた。

イ 新たな取り組み

SAP、サイクリング、トレッキング、ソラテラスなどにより、国内女性向けのツアーや個人手配、長期滞在型、40歳未満観光客、アクティブシニアを対象とした新規事業に取り組んでいく予定である。

5 考察

今回視察した（株）WAKUWAKUやまのうちでは、どこでも見られる空き店舗が、行政に頼らない各分野のプロの知識と、やる気のある若者たちによって、店舗・旅館へと素敵な空間に再生されていた。

湯田中温泉街では、観光資源はあるが地域経済に結びついていない、インバウンドによる好機をどう生かしていくか等の課題があった。しかし空き店舗の利活用など行政では難しい事を迅速に対応し、古民家・空き店舗の価値を見出し、外国人や訪れた観光客のニーズに合わせ上手に生まれ変わらせ、地域活性化につなげていた。

資金調達も従来の金融機関からの融資と違った方式で、金融機関も加わったファンド方式を取り入れ、実施者のリスク分散を図りながら、初期段階からマネジメントして実現まで導いていた。

まちづくりへの若者の熱意に投資家が投資し、その資金で事業展開、飲食店・ホテ

ル等を開業、泊食分離をすることで地域振興、産業の創出につながっていた。
また、若者がI・Uターンすることで次の事業を起こし、定住につながるなど、まさに好循環な取り組みであった。

彼らの事業展開のスピード感と視点・感覚・取り組みの姿勢に社名のとおりわくわく（WAKUWAKU）させられた。店舗をリノベーションする際に、内装を古いりんご箱を再利用するなど、レトロな雰囲気改装していた。朽ちていく建物に命を吹き込み再生させるのは若者たちの感覚と行動力だと強く感じた。

「稼げる観光産業」は、やはり行政だけでは限界がある。地域活性化はやる気のある若者等をサポートし、育成できるかが重要である。岡社長から鶴岡で展開されているヤマガタデザイン社の取り組みが話題に出された。やる気のある人を呼び込み、資金を集め、事業を展開し、雇用を生み、定住を促し地域を再生させていく、このような取り組みがここ庄内地域で展開されている。そのような仕掛けが出来る人材の重要性を強く感じた。

本町では、地域おこし協力隊によって山の恵みの加工や特産物の開発等、様々な取り組みがされている。客層やニーズを絞り込むなど、実効性のある目標を立て情報を発信し展開していくことを期待したい。